単身赴任レジストリ

あべさとし歌集

定年を間近に控え、単身赴任した町は、生まれ故郷に近いウミガメが来る町だった。

単身赴任レジストリ

毎日の洗濯たたむ君の手がしおりのように挟み込むもの

ウミガメが来るという町目覚めれば潮の香りがなぜか懐かし

買ってきて疑いながら食べてみて意外にいけるコンビニパスタ

廃校に今年も桜咲き誇り花びらの舞う音聞こえきぬ

青空の色も忘れし梅雨空に鮮やかに咲く紫陽花の青

梅雨明けて入道雲に蝉の声青田を風が踏み分け渡る

帰省した大学生の娘から春とは違う香り漂い

北海道旅行

「

タンチョウの留守に訪ねし湿原に鶴たちが舞う幻を見る

穏やかなオホーツク海キャンバスに沈む夕日が赤い絵を描く

摩周湖の霧晴れ渡り見つめ合う空と湖面の語らいを聴く

知床の森にかくれし湖に住みし小鮒は何の化身か

照りつける夏の日差しにナナカマド赤く染まりて忍び寄る秋

」

澄みきった群青の空眺めても幼き頃の空に帰れず

朝日浴び山の斜面に群れるトビ僕は乗れない上昇気流

寺の鐘聞こえる町の居酒屋でビール片手に今日も祝杯

ほろ酔いで帰る夜道に何処からか金木犀の香り仄かに

裏山で妻呼ぶ鹿の声響き寝付かれぬ夜を静かに眠る

紅葉散り秋深まりて遠ざかる花の香りも今は忘るる

薄紅の心惹かれるシクラメン離れて暮らす君の口紅

町中にイルミネイション灯れどもさやけき星にかなうはずなく

子や孫に囲まれ過ごすクリスマス密かに願う「時間よ止まれ」

スーパーで檸檬選べばどれ一つ完璧な檸檬無きことを知る

五十過ぎ黄昏れることの意味を知りぎゅっと君の肩抱きしめる

鳥たちの世間話に目を覚まし布団の中でしばし聴き入る

星々にとり残されたる白き月霜降る朝の空にぽつんと

どう猛なウツボもやがて開かれて酒の肴となり果てる冬

穏やかな海に向かいて魚釣れば僕の内なる海が騒ぎし

山上で鳥や獣にかたちかえ何処へ行くのか流れ去る雲

菜の花に誘われ蝶が舞う季節今年はやけに春が永そう

見上げればはや咲き初めし桜花弥生の風に心ざわめく

あとがき

短歌は、本来、縦書きであろう。縦書きなのは、木簡や短冊など道具の制約の結果かもしれないが、視覚的にも感覚的にも縦書きの方が美しく感じてしまうのは、 年のせいかもしれない。今の道具は、パソコンなどの電子機器であり、媒体は、紙ではなく、電子ファイルであるならば、短歌も横書きに馴染むように、工夫が必要な時代なのだろう。

単身赴任レジストリ

http://p.booklog.jp/book/59852

著者 : osakana34
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/osakana34/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/59852

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/59852

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ